

2023年6月3日

5月24日に受信した国際放射線防護委員会(ICRP)からの返信(2)
に対する原子力市民委員会(CCNE)からの3通目のレター【和訳】

返信をありがとうございます。我々がお送りしたライブセッションでの報告提案の要旨が不採択とされたことに驚いています。これに代わるものとして、ビデオやポスター報告への要旨投稿のご案内には感謝しますが、過去にICRPのイベント(Recovery 2020、Radiation protection WS 2020、ICRP 2021+1など)に投稿した経験のあるメンバーもあり、それらは投稿すれば、通常採択されるものであることを理解しています。今回の共同での提案が受け入れられなければ、各個人が投稿する予定でした。

2011年以来のICRPシンポジウム(2011 USA、2013 UAE、2015 France、2017 Korea、2019 Australia、2021+1 Canada)を振り返ると、福島に関して報告を行ったのは、ICRPのメンバーである甲斐氏、酒井氏、本間氏、伴氏をはじめとする福島県立医科大学や東京大学の教授などです。市民として報告したのは、ICRPダイアローグを主催しており、いわき市に住む安東氏のみです。我々が提出した要旨に書いたように、多様な被災者の声を聴いていないことが、福島での放射線防護の最大の問題です(自主避難者や長期避難者ともに)。ICRP103以降、ICRPは放射線防護策の策定にステークホルダーの関与が重要であると強調しています。それをICRP2023東京や、今後の基本勧告の改訂でも実行すべきです。

ICRPが我々の口頭での報告提案を採用しないのであれば、“セッション4: 福島第一事故の経験がどのように放射線防護を改善するか”で報告するスピーカーを教えてください。もしそれがICRPのメンバー、大学教授やICRP146で紹介されたICRP福島ダイアローグ参加者のような偏りのある人選であれば、福島での問題の本質は理解できませんし、ICRPやICRP勧告への信頼は得られません。最初のレターに書いたように、我々はより多様で批判的な立場からのスピーカーを推薦することができます。

参加料金の引き下げについての検討もありがとうございます。ウェブサイトを見ると、ICRP2023に、リモートで学生は1.5万円で参加できるようですが、Q&Aセッションには参加できないようです。我々はICRPシンポジウムの動画やポスターなどがシンポジウム終了後に無料で公開されていることを知っています。ICRP2023および今後のシンポジウムの運営については、Recovery After Nuclear Accidents 2020のような形式、つまり、通訳もあり、Q&Aも可能で、無料であることを想定して要求しています。ICRP2023については、日本の原子力規制庁からも予算支援があると認識しています。ステークホルダーの参加が確保されるよう、運営上の提案についても再考してください。